

【表題】 客観的・主観的情報格差を感じている高齢者の特性

【発表者】 水野一成 (NTT ドコモ モバイル社会研究所)

【目的】 本研究は,高齢者における情報格差を主観的および客観的観点から類型化し,各類型の特性を明らかにすることを目的とする.

【対象と方法】 調査対象は,全国に在住する 65~84 歳の男女とした.性・年代および居住地域・都市規模に基づいて割付を行い,訪問留置法により 2025 年 1 月に実査.回答数は 1,031 人(分析対象者は分析項目に欠損の無い 940 人).

客観的情報格差は,情報機器の利用によって生活の中に肯定的な変化が生じたかを指標とし,「変化有」と「変化無」に分類.

主観的情報格差は,日常生活において情報機器を利用できない・使いこなせないことにより不満や不利益を感じているかどうかを指標とし,「感じている」と「感じていない」に分類.

これら 2 軸を基に「納得型 (変化有・感じていない: 23.9%)」「向上型 (変化有・感じている: 21.3%)」「葛藤型 (変化無・感じている: 25.6%)」「無関心型 (変化無・感じていない: 29.1%)」の 4 類型に類型化.

類型化結果を目的変数とし,数量化理論第二類を用いて各類型の特性を分析.

【倫理的配慮】 調査員が被験者に対して調査内容および方法について十分な説明を行い,同意が得られた者のみに回答を依頼.また,本調査の実施については当研究所所長の承諾を得ている.

【結果】 「納得型」については,特筆すべき特性は認められず,平均的な高齢者に近い.「向上型」は対面での社会的交流が活発であり,情報機器の利用において友人からの影響を受けやすく,利他的傾向が認められた.また,情報欲求志向およびイノベータ度が高く,主観的健康満足度も高い傾向.「葛藤型」も「向上型」と同様に,対面交流が活発で,情報機器に関して友人からの影響を受け,利他的傾向.一方,イノベータ度は低く,主観的健康満足度も低い傾向.「無関心型」は対人交流が少なく,情報機器利用において友人からの影響を受けておらず,利己的傾向.

【考察・結論】 主観的情報格差は対人関係からの影響を受けており,一方で客観的情報格差は個人のライフスタイルの影響を受けていた.